

やけどのはなし（湿潤療法）

やけどを負う機会が多い季節になりました。日常起こりうるやけどの治療についてのお話です。

◎やけどの程度

I度熱傷は皮膚の表面が赤くなる程度で、II度熱傷は水疱ができた熱傷です。これは処置を誤ると容易にIII度に移行し（深いやけど）低温熱傷も多くはIII度です。

◎治療の原則

消毒はしない。水道水で洗う。乾かさないようにラップなどで覆う。

◎まず水洗、冷却を

やけどがひどくなる（深くなる）のは熱による影響がどれだけ続くかによります。熱を出来るだけ早く取り除くことが重要で、冷やすのは最初の10分間が大切です。さらに冷水で冷やすのは痛みを和らげる効果があります。冷やししながら移動するときは水と氷を入れた袋を当てて冷やすとよいでしょう。

◎消毒は厳禁

消毒薬は皮膚の細胞の再生を抑えてしまうとともに本来皮膚が持っている細菌に対する抵抗力を奪い、細菌感染を助けてやけどを深くしてしまいます。汚れは水道水で洗い流すだけでよいのです。水道水による水洗より勝る消毒はありません。

◎水疱の処置

水疱は傷を保護する働きがあるのでできる限り破らないように、無理に衣服を脱がせて水疱が破れることがないようにしましょう。水疱が破れたら水洗の後、料理用ラップで覆い、その上から冷やししながら病院へ。

◎湿潤療法（ラップ療法）

傷が治るためには乾燥させないことが大切です。傷を水洗したのちラップで覆うと細胞の再生のために必要な傷から染み出した水分が失われることなく保たれ、皮膚の再生を早めます。ガーゼなどで覆うとこの大切な水分がガーゼに吸収され傷が乾燥してしまい、細胞が生きていく環境が失われます。ガーゼははがす時とても痛いのですが、ラップははがす時痛みが抑えられます。

◎塗り薬は使わない

軟膏などは汚い痂皮（かさぶた）を形成し、細菌の繁殖の原因となります。

◎民間療法は危険

アロエやまむし焼酎はI度のやけどでは少しは冷やす効果があるかもしれませんが、感染予防、皮膚再生の点で問題があります。

◎病院受診

II度以上のやけどは水洗後、ラップで覆えるところは覆って、水と氷を入れた水袋で冷やししながら病院へ受診してください。金山病院では湿潤療法を行っています。

下呂市立金山病院 院長 古田智彦